
楽園の薔薇

柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園の薔薇

【著者名】

Z4969Z

【あらすじ】

どこかの扉で繋がっている楽園。

その世界には闇を照らすために『薔薇』と呼ばれる人がいる。

でも、今回の『薔薇』はやる気なし！？

2人の護衛を連れて、いやでも仕事に行く。

そんな『薔薇』でも大丈夫…？

楽園の闇を照らす『薔薇』たちの、神秘的（？）な物語。

* これは別サイトで私が「ふーちゃん」として書いていの小説です。
盗作なんてことはないです。

プロローグ

樂園の薔薇

♪プロローグ♪

ある日。

僕は不思議な人を見た。

水色の目。

それに明るい茶色の髪。

その女人人は、野原で何かを唱え、扉を作った。

そして、その扉の中に入つていく。

扉の中はまぶしい光であふれていた。

そんなことが何日も続き、がまんしていた僕も思いきつて話しかけた。

「その扉は何？」

と。

そうすると、その人は僕をびっくりした目で見つめた。

「あなた…、これが見えるのね！」

と喜びながら言う。

「あなたも、来る？ 樂園に。」

そう言って、僕の手を取ると、扉の中へ入つた。

目を開けると、そこは自然が広がるきれいな場所。

「来てくれてありがとう。あなたには、この子を頼みたいの。」

「この子…？」

考えて、気付いた。

この子というのは、女人のお腹にいる赤ちゃんのことだ。

「そこで、あなたに、今日生まれてもうつわ。」

その最後を聞くか聞かないかの時、僕の意識はとぎれた。

* * * * *

「ソフィア」

その声に気付き、私は振り返る。

「ユニゾン」

「もう、終わつたか？」

「ええ。今生まれたはずよ。」

その通り、建物にはどよめきがあった。

「あの子には、イスフィールの許婚になつてもうりの。」

まだ生まれていらないイスフィールをなでながら、私は田を閉じた。
「だからね、ユニゾン。あなたと、さつきの子… そうね、セイレー
ンにしましよう。その2人が中心になつてイスフィールを守つてや
つて。この子は、この楽園にあるたつた1つの薔薇なんだから。」

私の言葉に、ユニゾンは静かにうなずいた。

「たぶんイスフィールは元気な子になるだらうから、そのうち、も
う1人あげる。…任せたわよ、セイレーん、ユニゾン。…イスフィ
ール、あなたは、この世界の闇を出来るだけでいいから照らして。
そして誰にともなくつぶやく。

「よろしくね」と。

1・一分咲きの薔薇？

樂園の薔薇

1・一分咲きの薔薇

< 1 >

「……。朝……？」

少女は寝台の上で首を傾げた。

「今日の天気は……。」

少し右にずれ、天井に着いている窓を見上げる。ややあつて、嫌そうにつぶやいた。

「……晴れえ～？」

実は晴れの日が大のきらい。

「雨でも降ってくれりやいいものの……。明日は逆さのてるてる坊主でもやろうかな。」

そういうながら、机の上のペンダントを手に取った。

これは、ルビーの粉で作られた、真っ赤な薔薇の形をしている。この樂園にたつた1つのものだ。

その時、ドタドタッと、外でものすゞい音がした。

少女は慣れているようにため息をつく。

そして、首にかけたペンダントを握りしめた。

これは、『薔薇』と呼ばれる者たちの特別な能力だ。

握りしめると同時に、少女の身体から、淡いピンク色のオーラが立ち上った。

しかし、少女は何かを思いついたようにペンダントから手を離す。

「やっぱ、無視した方が良いのか？」
と、つぶやいた。

その時、部屋についている最高級の扉がものすごい音を立てて開かれた。

「僕の薔薇姫！元気だつたかい！？」

薔薇姫と呼ばれた少女は、額に青筋を浮かばせる。

扉を開けたのは、そこにいた少年だらう。

「セイレーン…。元気だつた？ですつてえ～？昨日も来ていたじゃないの！」

少女は無視すると決め込んだはずなのに、耐えきれず文句をつ。

少年 セイレーンは、満面の笑みを浮かべた。

「やだなあ、薔薇姫。一日で熱が出るかもしねないんだよ？」

「うるさい。私は年中ずーっと元気です！」

少女の頭の中で、何かが切れる、ぶちつといつ音。

「だからあんたは～～薔薇姫って呼ぶなって言つてゐるでしょ～～！」

少女 イスフィールは大声で叫んだ。

* * * * *

エプスタイン家。

それは、この楽園にある珍しい一族だ。

その家で生まれる姫は、たつた一つの薔薇のペンダントを身につけることが出来る。

身につけた者は、『薔薇』と呼ばれ、楽園の闇 悪いことを封じなければならぬ。

そして、今回の『薔薇』は。

「あーもうつ～帰つてよ～、うつとうじうつ～」

エプスタイン・イスフィール。

「やだつて僕も言つたでしょ～。

イスフィールは、文句を言いつつ廊下を歩いていた。

遠い親戚で、許婚 婚約者のセイレーンと一緒に。

「なんで父様の所に行くのに、あんたもついてくんのよ。」

イスフィールの周りに、どよ～んとした空氣。

「いいんだってば。ユニークさんは僕のこと、いてもいいみたいだ
し。」

話しているうちにユニーク（父）の部屋についた。

イスフィールは、セイレーンの言葉を無視して扉を開ける。

「父様！入ったから！」

普通は『入るよ』ぐらいなのだ。

けれど、イスフィールは『入ったから』。

「お、来たかイスフィール。セイレーン君も入つていーぞ。」

セイレーンはその言葉を聞き、ほらねと言うように目を細めた。
さっきのイライラが残っているせいか、イスフィールは見ないふり
をして席に着いた。

セイレーンも同じように席に着く。 もちろん、イスフィールの
隣。

その光景を目にしたユニークは、じらえきれずに吹き出した。
そのまま大笑いをする。

そんなユニークを、イスフィールはものすごい顔でにらんだ。
「ユニーク、いいから話を続ける。と言つか、話し始める。」

全然気付いていなかつたが、ユニークの後ろに人がいた。

1・「分咲きの薔薇？」

樂園の薔薇

1・「分咲きの薔薇」

＜2＞

「え、セイレーーん…？」

その少年は、とてもセイレーーんに似ていた。イスフィールは自分の隣を見てみたが、そこにはちゃんとセイレーーンがいた。驚いた顔で。

天の助けとばかりに、ユニゾンは話を始めた。

「ああ、彼はレイアースと言つてね。セイレーーん君と同じく、未来のここ 地球から来たんだ。ここにの執事になつてもう

「なんですつてえ！」

ユニゾンが最後まで言い終わる前に、イスフィールが立ち上がつた。

「あのねえ、父様。私、執事とかいらないんだけど。

「違うんだ、イスフィール。彼は、君の母さん ソフィアが呼んだ人なんだよ。」

「…母様が？」

意外なユニゾンの言葉に、イスフィールは驚く。

「君は薔薇だろう？だから、その護衛もかねてている。」

「それならセイレーーんがいるじゃない。」

「…セイレーーん君は確かにいい護衛なんだが、イスフィールが、その…、元気すぎるんだ。」

「…あ、そ。」

「で、どうして、その、レイアース、だつけ？」

セイレーンはレイアース自身に確認した。

レイアースは小さく頷く。

「どうしてお前に似ているか、だれ？」

レイアースが自分でセイレーンの質問を口にした。

イスフィールは、そんな2人を見比べることしかできない。

「ああ、それはね。」

ユニゾンが口を開く。

「2人は双子だつたんだよ。」

「ええ……！」

レイアースも含めて、3人で驚きの声を口にする。

「確かにそつくりだけど、双子つて……。」

「ユニゾン。どっちが上だ？」

レイアースが聞く。

「上？」

「どっちが兄かってこと。」

セイレーンも同じようで、ユニゾンが分からなくなつたところを説明した。

「そういうことか。それは、確かにセイレーン君じゃないか？」

その言葉を聞くと、レイアースは嫌そうな瞳をセイレーンに向ける。

「何だよ、その目は！」

セイレーンは、レイアースが向けた瞳に、少し引き気味になりながら、反抗する。

「いや。」

レイアースは首を振る。

ふと、イスフィールが拳手した。

「あ、私も分かる、その気持ち。これが兄だつたら、すぐ嫌。」

イスフィールに『これ』扱いされたセイレーンは、頭が真っ白になる。

そんなことも全然分からぬレイアースは、頷きながらイスフィー

ルの頭をくしゃくしゃとなでた。

（お、大きい…。）

レイアースを見上げて、思わず感じてしまつ。

2人の身長差、約10cm。

「まあ、そういうわけだから。レイアース君、君はイスフィールのそばについてくれないか？薔薇は命を狙われることも少なくない。」

真剣になつたヨーロンの言葉に、イスフィールは反抗するのをあきらめた。

1.1 分咲きの薔薇？

樂園の薔薇

1.1 分咲きの薔薇

＜3＞

「で？フルネームでなんていうの？」

部屋につくと、イスフィールはレイアースを振り返り、そう聞く。深い緑色の瞳。

紙はその瞳に似合わない黒だった。

そんな彼を見ていると、深い色に引き込まれるような錯覚を覚える。レイアースは、少し驚いたような顔をした後、目を閉じて吐息のようにつぶやいた。

「メイデン・レイアース」

「地球での名前は？」

またイスフィールが問うと、レイアースは少し考えるような顔になつた。

「…覚えていない。というより思い出せない。」

そして、ふとレイアースが床に目を向ける。

「？」

「お前…薔薇のペンドント、つけてないのか？」

「へ？…あつ！あの時セイレーンに投げつけた後、すっかり忘れてたつ！…」

しゃがんで探し始めたイスフィールを見て、レイアースは思わず笑つてしまつた。

「お前さあ…普通投げたりしねえだろ。そんな大切って言われてるものさ。しかも、護衛に向かつて。」

イスフィールは、しゃがんだままレイアースを見た。

そして、また下を見る。

「大切だなんて思つてないもの…」

イスフィールがつぶやいた言葉は、意外な言葉だった。

エプスタイン家の人々は、薔薇のペンダントは神聖な物だと教えられてきたはず。

もちろん、イスフィールもそう教えられてきた。

それなのに、イスフィールは大切だなんて思うことなど、あるわけがない。

「なぜ？」

レイアースが問う。

イスフィールはやつと見つけたペンダントを握りしめて語った。

「だつて、私はこれのせいだ、ここに閉じこめられた。」

その言葉を聞き、レイアースの目が驚きで薄い緑色に変わった。

「私は薔薇だつたから。…さつき父様が言つたとおり、薔薇は命を狙われるの。闇の人の手によつてね。そのせいだ、何もない真つ暗な部屋で、私は過ごすことになった。」

「でも、それつて薔薇のせいじゃないんじゃ…。」

「薔薇のせいよ！だつて、闇の人がいたつて、薔薇じゃなかつたら、そんな風に過ごさなくともよかつたの！全部、薔薇のせいだもん…。」

「

子供のようにイスフィールは繰り返した。

するとレイアースが、しゃがみこんでくしゃくしゃとなでた。さつきとは少し違うような感情がこもつている。

「お前、やっぱり薔薇にそつくりだ…。」

レイアースの目は少しうるんでいて、明るい緑色になつていた。

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！？

樂園の薔薇

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！

<1>

次の日。

イスフィールは、部屋に誰かが入つてくる気配を感じ、むくりと身を起こした。

「あ、起きた？」

一日でなじんだらしいレイアース。

彼がさつきの気配の犯人だ。

「…今日の天気…」

「あ、？俺のこの姿見たら分かるだろ？雨だよ、雨…！」

確かにレイアースの服はところどころ濡れている。

イスフィールは安心して息をついた。

「どうした？雨の天気が好きなのか？」

レイアースが不思議に思つて聞いた。

「うーんとねー。雨が好きって言うより、晴れが嫌い。」

「へー。変わつてんなあ。」

理由はある人のせい。

「仕方ない」としか言いようがなかつた。

と、その時。

昨日と同じようにガタガタッと外で音がした。

「ひつ…」

「ひ？」

レイアースが不思議そうに首を傾げる。

「レイアース！…今日、本当に雨だよね！うそじゃないでしょ！…？」

「降つてたよ、すぐ。ほら、今だつて雨音するし。」

イスフィールの焦りに、レイアースも思わずつられた。

ちなみに、どうしてあせつているかは不明。

そしてまた、昨日と同じように扉が壊れそうになりながら開かれた。

「薔薇姫 遊びに来たよ。」

「セ、セイレーン！…何で来てんの！…？」

驚きのあまり、部屋の隅っこに逃げる。

「なんでもなにも無いでしょ。だつてこひ、僕の家だし。」

当然のように言うセイレーン。

イスフィールが聞いているのは、実はそのことではなかつた。

「じゃなくて！…あんた、雨の天気が嫌いだつて言つてたじゃない！」

「そーだっけ？」

「とぼけないで！…服が濡れるから嫌いって！…なのになんでいんの？」

「月日がたつと、嫌いな物も変わるつてことだよ、薔薇姫」

「なにそれ！…あ、じゃあ好きな人も私じゃないのね！」

「いや、それはない。」

「えー！！！」

意味の分からぬ会話が、レイアースに押し寄せる。

「ちょ、ちょつと待て！…セイレーンが来てるのも分からぬが…」

「…レイアース君。今、僕のことを呼び捨てに…！」

「はあ？…どうせ双子だし。」

「双子でも兄は兄なんだよ。」

「信じてねえし。」

一刀両断。

「それにレイアースの方が大人っぽいし。」

イスフィールが続けた。

「イスフィール。僕のフォローしてくれないんだ〜〜」

わざわざ泣きまねを始めた。

「するわけないじゃない。晴れの日ばかりやつて来たりして、うつ

「うしーのー」

「なるほど。」

レイアースが小さくつぶやいた。

（せうかこれが「嫌いな理由」）

レイアースに心の中で『これ』扱いされたセイレーンは、気を取り直して、と立ち上がる。

なんとセイレーンには理由があつたらしい。

「は？ 気を取り直して帰んの？ じゃーね。」

イスフィールがなんか冷たい気がする。

「ちがーうー君に仕事。」

「はあ？」

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！？

樂園の薔薇

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！

<2>

「薔薇として、解決してもらいたいことがあるんだ。今までとはうつてかわって、真剣なセイレーン。」

イスフィールが不思議そうに首を傾げた。

「闇の人物か？」

レイアースも、緑色の瞳が驚きで薄くなる。

「そこはまだ。でも、暗殺されたのは確かだと。」

「暗殺！？」

イスフィールの反応が少し変わった。

「おつと、ついうつかり。」

「ふざけるなっ！：で、どこの奴だ？」

「街の方にあるラクリーン家。その当主とズズミって人。」

セイレーンは淡々と説明する。

「そうか…。あそこは気性が荒い家だからな…。ケンカとか、そういうので殺害つてのもありうる。。。」

レイアースも一人で考えている。

しかし、イスフィールの頭の中は真っ白だ。

（殺害つて…。大変じゃない！）

「というわけで、イスフィール。詳しいことを調べてから向かう。その間待機している。」

レイアースはそれだけ言つと、セイレーンとともにどこかへ行つてしまつた。

「え…、ちょっと私は…？」

イスフィールの声は、レイアースが閉じた扉に跳ね返り、部屋に響いた。

（あいつのことだから…。たぶん何かするだろうな。）

長い廊下を走りつつ、レイアースは苦笑した。

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！？

樂園の薔薇

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！

＜3＞

「つたくもう…。勝手に調査に行つたりして、何の為の護衛なの〜！ずいぶんいい加減だわ。」

イスフィールは1人でぶつぶつ言いながら、ラクリーン家のことを思い出していた。

（えつと…確かに、街はずれにある小さな家。で、当主とスズミさん…つて、ラクリーン当主の奥さん。1人子供がいて、その人が私と 同い年…だけ？名前が…）

その時、開きっぱなしの引き出しの中から、ひらりと紙が出てきた。

「?なにこれ？」

封筒らしき物。

中の手紙には『イスフィールへ』と書いてあった。

『イスフィールへ

君がエプスタインの子だと分かつて、そっちに行つてからもう どれくらいたつのだろう。

僕はラクリーン家の人々に拾われて、楽しく過ごしている。名前も変わって、ラクリーン・トライドになつたんだ。

本当の用件はそういうことじゃなくて。

この頃、ある執事の様子がおかしい。

その執事の噂が『夜になると、暗殺活動をおこすらしい』とい

うものなんだ。

薔薇となつた君に、その人のことを解決して欲しい。

様子が闇に飲まれた感じと同じなんだ。

遊びに来るついで、とでも思つて来てくれないか。

ラクリーン・トライドより

手紙はラクリーンの人からだ。

イスフィールあてといふことは、わたくしの当主とスズ//わたくしの子供だと考えられる。

「ラクリーン・トライド…? つて誰?」

答えてくれる人はいない。

「でもこれつて、さつきの事件に関係してゐんじや…。」

そう考えて、一から読み直す。

「うん。きっとそうだ。」

そうして、護衛の2人がいないかと見回した。
なぜかつて?

「私、いいこと思いついちゃつた!」

イスフィールは、こうして1人で行くことを決めたのだった。

2・「闇を光で」イスフイール大作戦！！？（後書き）

なんというか、お茶目？な感じですよね。

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！？

樂園の薔薇

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！

＜4＞

その頃、セイレーン達はと「うと

「…なあ、嫌な予感しない？」

レイアースがセイレーンに聞く。

何のことかは不明だけど

「なにそれ？」

「いや、あのイスフィールだぞ。絶対何かある！」

決め込むレイアースに、セイレーンはため息をつく。

「そんなの、ふつうじやないか。」

と。

* * *

「んーっと…。服はセイレーンのを使うとして、髪はどうしよ？」
イスフィールは、レイアース達がそんな話をしていることも全然知らず、準備にとまどつっていた。

その作戦とは。

『男に変装して、ラクリーン家に忍び込み、調査しよう！作戦』
名前が長い作戦である。

「髪…結えば大丈夫？かな？」

とつぶやき、後ろで軽く結んだ。そしてセイレーンの服に着替える。
「ま、一応大丈夫だね。」

鏡でもう一度確認すると、イスフィールは窓から外に出る。外はもう晴れていて、抜け出すにはぴったり。

（「めんね、レイアース、セイレーン）

心中で謝ると、イスフィールは町に向かって走り出した。

「イスフィール！ 現地調査に… つて、あれ？」

今度はレイアースが扉を開ける。

壊れそうな音はもちろんした。

しかし、その部屋にイスフィールはもういなかつた。

その光景を見て、レイアースは固まる。

「どうした？ 急に止まつたりして。」

「ちょっと遅れてきたセイレーン。

「うそだろ…。」

ま、自業自得だな。

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！？

樂園の薔薇

2・「闇を光で」イスフィール大作戦！！

＜5＞

「…」こつでどこ？」

イスフィールは完全に迷子になっていた。

（だつて！小さい頃から外に出でていらないんだもん。仕方ないよ、これ！あ、私ってすごいバカ…）

心の中でぶちぶち言いながら歩いていく。

ため息だつて、10回はもうとっくに超しているだろう。

「引き返そうかな…」

そうつぶやいて回れ右。しかし、もうどこを通つてきたかも不明である。

（どうしよう…？）

また回れ右するとどうなるでしょう。

（ま、カンでここう…）

正解は、最初の向きに戻る。分からぬ方、やってみて。

どんどん進むと途中で誰かに呼び止められた。

「お前、イスフィールって奴、知ってるか？」

「れ

レイアースと云つたが「れ」でどどめる。

ということは、自分が出てからすぐに戻つてきたようだ。

「だ、だれだよ、それ！イスフィールなんて知るか！それに、わ、じゃなくて、俺の名前はイズライール！人違いなんてすんなよ！めーわくだからなつ！！」

最後の「めーわぐ」と言つところだけ力を込めた。

これはイスフィールとしての気持ち。

もしバレたら、すごいことになる。

『エプスタイン家の薔薇姫が家出!』

などということになりかねない。

というより。

（私つて、男のフリ上手なのかな。ちょっと悲しい。）

だって。

「そうか…。」

とかなんとか言いながら、レイアースもどこか行っちゃったし。（こりや、本物だと勘違いしてないか…？）

逆にガツカリってかんじ。

（おつと、どんどんマイナーになつてしまつ。そういう、田舎はラクリーン家の調査！）

イスフィールは心の中で自分を応援した。

3・ラクリーン家調査「闇の人物」?

樂園の薔薇

3・ラクリーン家調査「闇の人物」

<1>

「で。」

レイアースを振り切つたのはまだいいことだったが、迷子だと言うことは変わらない。

「これは人に聞いて教えてもらつしかなのかなあ。」

イスフィールがげんなりしていると、また(?)肩をたたかれた。今度はどちら様と思い振り向くと。

(だれ?)

知らない人だつた。

「君…イスフィールにそつくり…。」

その人もイスフィールのことを知つていて。

(おかしいな?薔薇姫のことは公開されないはずなのに…どうしてこんな人が?)

と、内心首を傾げていると、その人はにっこりと笑つた。なぜかその笑顔に懐かしさを感じた。

「ねえ。君の名前は?」

人懐っこい笑み。

少しセイレーンと印象がカブつてはいるが、その笑みの裏には悲しみがほんの少し読み取れた。

「わ…じゃなーくーてー。俺の名前はイズライール。イールつて呼んでもいい。」

また私と言つそうになるが、『まかした。

「そりゃ。僕はトライド。ごめんな、イール。人ちがいだつた。本当にごめん。」

本気で頭を下げるから、イスフィールも少し慌てた。
ここは技が必要となる場。

「そこまでするなよ。それに、話しかけたのが俺でよかつたじゃん。」

『トライド』という重要なキーワード。

トライドは「へ？」と顔を上げる。それに向かって、イスフィールは、にっこり笑った。

「俺の主人 イスフィールから伝言を預かっている。」

3・ラクリーン家調査「闇の人物」？

樂園の薔薇

3・ラクリーン家調査「闇の人物」

<2>

「あ～くそっ！イスフィールの奴め、どこいつたんだ～？」

一方、イスフィールに見事にだまされたレイアース。

「レイアース！見つかったか？」

もう町の半分を探したセイレーンが駆けてくる。

両手で×の形を作つて見せた。

「そうか…。ま、あいつは昔から行動力だけは人一倍あつたもんなあ。どつかに調査しに行つたんだろう。」

能天氣に口笛を吹いている。

（…あいつがセイレーンを嫌いになる気持ちが分かつた気がする…）
なんといっても、一緒にいるだけで疲れが100倍…またはそれ以上たまりますつて感じなのだ。

セイレーンは顔つきをサイコロでも転がすように変えて言った。

「まあ、イスフィールもイスフィールなりにがんばっているんだ。僕らも負けないように調査に行こう。」

何の勝負だとつっこみたくなつたが、こういつとこうだけはカッコいいなと思い、双子の兄の背中を追いかけた。

* * *

伝言というのはもちろんんうそ。

「本当！？イール、僕の家に来てよ！それで、その話を教えて。」

しかし、トライドは、もうすっかり信じてしまっていた。
そして、半分引きずる感じで、イスフィールを自分の屋敷に連れて
行つた。

3・ラクリーン家調査「闇の人物」?

樂園の薔薇

3・ラクリーン家調査「闇の人物」

<3>

「で? 伝言つて何? イスフィールはなんて?」

椅子に座つたとたん、トライドはイスフィールを質問攻めにする。
少しだけイスフィールはたじろいだ。

(何も考えてないじゃーん! !)

ただ、トライドの家に入り込む為についた嘘。

だから、「なに?」と聞かれても、どうしたらいいのか分からぬ。

(ああ〜〜〜。ここに長く居られるための理由〜〜〜)

「あ、もしかして、あの手紙のことかな? 闇の人かもしけないって
いう

」

何を勘違いしたのか、トライドがそんなことをつぶやいた。

(それだ!)

心の中でひらめく。

顔に出さずとに注意しながら、出まかせの『理由』をイスフィール
はしゃべり始めた。

「そう、そのことで、なんだけど。『まだ闇の人物と確定したわけ
じゃないけど、一応イズライールを送つておく。だから、執事とし
て使っていいから、その子に調査させてほしい。』だそうだ。」

ちょっと早口で言い切る。

トライドはふーんだけ言った。

(…これはいってことなのかな? 他に何か言つことはないのか!)
少しイライラ。

ややあつて、トライドは口を開いた。

「分かつた。いいよ、イール。分かるまでラクリーン家で調査して。僕も多分狙われてるし。イスフィールの執事がいるなら心強いし…」
「ちよちよちよ、ちよつとストップ！」

トライドの言葉にイスフィールはストップをかける。

「今、僕も狙われているって言ったよな！…どうじつ意味だ！？」
身を乗り出して聞いたイスフィールに、トライドは少しどまじう。
「え、いや、だって、僕のお父さんとお母さん、それで死んじやつ
たし。」

（つながつた！）

「え、まあとにかく。よろしく、イール。」

あの人懐っこい笑みに、頭が少し痛む。

（どうして…？会つたのは初めてのはずなのに。）

「あ、ああ。任せろ！」

とかなんとか、てきとーに囁く。

調査をするためには、かなりの時間が必要だ。
そしてふと考える。

「悲しくないの？」

3・ラクリーン家調査「闇の人物」?

樂園の薔薇

3・ラクリーン家調査「闇の人物」

<4>

「悲しくないの?」

(やべつ! 女っぽくなってしまった〜!)

トライドは少し驚いた顔をした後、「ううん」と小さく首を振る。ちょっとの笑みを浮かべて。

「なぜかね、泣けないんだ。僕は下町で育つてね。 あれ、イスフ

ィールは教えてないの?」

「あ、うん。昔のことは話さないんだ。」

もう口から出まかせ。

トライドのしゃべる意味も分からぬ。

「そつか。下町でイスフィールと会つたんだけど。話に戻るよ。僕はその頃泣き虫でね。今になつたら、涙が出なくなつちゃつたんだ。」

(下町で? 私は外出したこともないのに、どうして?)

「そういえば、あの手紙もおかしい。」

トライドとの関係は不思議なことがたくさんあつた。

(まず、あの手紙の『君がエプスタインの子だと分かつて』の文。私は最初イスフィールだということを隠してどこかにいたつてことよね。それでトライドと私が下町で育つた…。でも、その記憶がない。それじゃあ)

「イスフィール?」

「は?え、ああ。」

考え込んでいたところを、トライドの声が現実に戻した。

「分かった。俺は、しばらくここにいるから。」

そうして締めくくると、トライドが案内してくれた部屋に入る。
(私の中には、私の知ってるはずの記憶がない。)

外は、もう暗くなっていた。

3・ラクリーン家調査「闇の人物」?

樂園の薔薇

3・ラクリーン家調査「闇の人物」

〈5〉

「ふあ～～。」

真夜中の商店街。

もう店は閉まっている。

そんな大通りを、イスフィールは男子の格好をして歩いていた。

「今日も出るのかなあ、闇の人物。」

イスフィールは町の人、トライド、ラクリーン家で働いている人に話を聞き、闇の人物を探していた。

イスフィールだって調査するつもりだと、その時。

曲がり角の向こうから高い悲鳴が上がる。

女性だと仮定し、イスフィールは走つて向かう。

(闇の人かもしれない。)

「誰だ!!」

(あ、男子で慣れてしまった。)

少しがつかりしたが、今はそれどころではない。

「あら、あなたも見てしまったのねえ。なら、次のターゲットはあなたにしようかなあ。」

そこにいたのは、茶色のローブをまとった女人っぽい。

「もしかして…闇の人!?」

「さてね。それを決めるのは薔薇の仕事だし。じゃ、またねえ～」

そう言うと、その人は茶色のローブをひるがえらせて、イスフィー

ルと反対方向に走つていいく。

イスフィールはしばし固まつていた。

(薔薇の仕事、かあ…。)

自分が薔薇なのに、ここにいることが情けないと感じた。

抜け出して、外に出て、浮かれて…。

(私、なにやつてゐんだろう…)

でも。

戻る気はしなかつた。

ここにいるのに、何もしないで帰る方が情けないと感じた。

もうすぐ太陽が昇る。

その太陽を見つめながら、偽りの人間『イズライール』として調査することを、再び決意した。

4・レイアースの「瞳」？

樂園の薔薇

4・レイアースの「瞳」

< 1 >

その日のレイアース達はといつと。

「「じつちじやなかつたか？」

と、やつきの叫び声を頼りに闇の人物（かもしぬない）を探していました。

「確かに現場はここだ。……でも、逃げたな、この様子だと。」
イスフィールの代わりに調査を長年やってきたセイレーンは、区別するのにも慣れていたようだ。

「あー、ここにイスフィールがいるという考えはだめだつたか。」
レイアースが今日何度も分からぬため息をつく。
イスフィールが『薔薇』としているかもしれないという、小さな希望を頼りに来たというのに。

と、その時。

レイアースの目に痛みが走る。

思わず押さえるが、さらに痛みが強くなるばかりだ。

「なんだよつ、これ……！」

そう呟くレイアースの様子に気付いたのか、セイレーンが振り向く。
「レイアース？どうしたんだよ。」「急に……目が……。」

セイレーンの黒い目が大きく見開かれた。

「……この手のものなら、ヨニゾンさんが知ってるはずだ。」

そう言つと、痛みにしゃがみこんでしまつたレイアースの手を引く。レイアースの意識は遠くなつていつた。

* * *

次に目を開けたところは、エプスタイン家にある自分の部屋だった。

「俺は……」

今はもう朝になつている。

出かけたのは確か夜で、目が痛くなつて。

あれ、何しに出かけたんだっけ？

そこまで考えて、ぼやけていた意識がはつきりとする。

「そうだ、イスフィール！」

やつと思い出した。

そしてくらくらする頭を押さえながら、ユニゾンの私室に入った。

「お、レイアース君。もう目は平氣か？」

「はい。おかげさまで……」

ユニゾンの能天氣な声がレイアースを迎える。

倒れない程度に、レイアースはその場で脱力した。

どうして大事な娘がいなつていうのに平和なんだろうか。

「ところでレイアース君。今まで見えなかつたものが、見えてはいないか？」

ユニゾンもこの間のセイレーンのように表情をこじらつと変える人だ。レイアースは頭を押さえていた手を離し、辺りを見渡してみた。

「……特に、何も見えませんけど。」

素つ気なくレイアースが答えると、ユニゾンはふむ、と考え込んだ。

「レイアースの瞳が発動されないとしたら……」

とか、わけの分からぬ言葉を呴いている。

ふと、その隣ですねたようにハーブティーを飲んでいたセイレーンの小指に目が止まつた。

「緑の糸……？」

そう呟くと同時にほつきりとそれが見えてくる。

「どうした？僕の小指が何かしたか？」

同じ小指をセイレーンが見ても、何もないようだ。

しかし、レイアースには確かに見えている。

誰かに繋がっている、数本の緑の糸が。

そして、その1本は

「俺の小指」。

4・レイアースの「瞳」？

樂園の薔薇

4・レイアースの「瞳」

◀ 2 ▶

これはその昔。

ゴニゾンが薔薇の護衛をやつていた頃の話だ。

「ゴニゾンー来て。おもしろいわよ、これ！」

図書室の奥から、当時の薔薇であるソフィアの声。

「図書室で騒ぐの禁止ー。で、どした？」

呆れ顔でゴニゾンが向かづ。

いつもこんな感じでうるさくなる。

どんなに注意しても、ソフィアは騒いでしまつのだ。

「今度はどんな本？」

と顔を上げると、ソフィアが本のページを見せる。

その本は『糸』という題名でアーヴである。

とまあ、そんなことは追いつて…。

「緑の糸？」

「そうよ！人の小指についていて、別名信頼の糸といつらじいわ。

そのページをざつと見てみると、深緑の糸を持つ者にだけ見えるらしい。

しかし残念ながらソフィアの糸も、ゴニゾンの糸も色は違つ。

「…私の糸か、ゴニゾンの糸が深緑だつたらいいのに。」

ふてくされたようなソフィアに、ゴニゾンは苦笑した。

* * *

記憶をたぐり寄せてみたユニゾンは、驚きで思わず立ち上がる。

「まさかソフィアは……！」

そのことを覚えていて、レイアースを楽園に送つたのだ。
しっかりと糸が見え、呆然としているレイアースの瞳をしっかりと
見てみると、ちゃんとした深緑。

たまに誕生で瞳の色が左右されるが、もとは澄んだ深緑だ。
もしその本の通りで信頼の糸だというのなら、レイアースの小指に
は

「レイアース君。今、君の小指にその糸は何本ある？」
まだ楽園に来たばかりだから、その数は少ないはずだ。

「3本だ……。ユニゾンと、セイレーンと、あと、もう1人。」

誰と繋がっているか、までレイアースはユニゾンに教えた。
おそらく、もう1人はイスフィールだろつ。

「じゃあ、この糸をたどつていけば……。」

「そうだ。その糸は信頼の糸。見えるのは君だけだ。その目は大切
にしなさい。」

「信頼の糸……。」

レイアースはもう一度自分の小指についている糸を見つめた。

あの呆然とした顔ではなく、しっかりと決意を固めたという顔。

「そうそう、セイレーン君もレイアース君も、ちょっと私の話を聞
いていいてくれないかな？」

言われた2人はとまどつたように顔を見合させ、頷いた。

そしてユニゾンは話し始める。

イスフィールの過去について。

5・イズライール、バレた！？

樂園の薔薇

5・イズライール、バレた！？

＜1＞

「あー…3日前から何の進歩もしてない…」

イズライールことイスフィールはラクリーン家の部屋で頭を抱えていた。

（調査しなきゃいけないのに…。）

早くしないとセイレン達に見つかってしまう。

「でも、なあ…。」

ため息がさつきから止まらない。

「イール？何があつた？」

こここの住人トライドが部屋に入ってきた。

これといってやばいことはないが、なぜかイスフィールは慌てた。

「いやいやいや、何でもないから！」

「…そう？」

妙にきつぱりと言い切つたイスフィールに、トライドは不思議そうな顔をして部屋を出て行つた。

今度はホッとしたようなため息がもれる。

「…」

（あのまま、抜け出したりしない方が良かつたかなあ…。いやいやいや、のこのこ帰つていつたら怒られて、一生笑われるだけだし…）
気持ちを切り替え、イスフィールは立ち上がつた。

「さあて！調査に行くぞお！」

立ち上がった拍子に、机に足をぶつけた。

* * *

だいぶ（本つ当たりほんの少しだけど）道を覚えたイスフィールは、情報をたくさんくれる店を知った。

普通の果物屋だが、そこにはおばちゃんが新情報を提供してくれる

のである。

ウラ道での名前は情報屋。

今日もそこに向かおうとしていた時。

途中で誰かに呼び止められた。

早く行きたいのに、内心ぼやきつつ振り向く。
そこにいたのは。

「お前、イスフィールって奴、知ってるか？」
「れ

レイアースと言つたが、「れ」でどうある。

つて、デジャブ？

前つて言つた抜け出した時とまったく同じ光景だ。
あ、でも一つだけ違う。

（何で笑つてんだ？）

レイアースがニヤニヤ笑つていた。

正直言つて怖い。

（もしやのまさか…バレたとかいう…）
冷や汗たらーり。

しかしちょつと言つてみよ。

「イスフィールって誰だよ？」

「ほあ。記憶喪失？」

「……。」

完全にバレていた。

「よし。」

回れ右をして駆け出す。

が、後ろにも知ってる人が。

「うつそお…。」

そこにいたのはセイレーン。

「はは…」と乾いた笑いだけ、

イスフィールの口から漏れた。

5・イズライール、バレた！？

樂園の薔薇

5・イズライール、バレた！？

<2>

「んで？」

「もう全部言いましたってばあ‥‥。」

すげー笑つてる（その笑いが逆に怖い）レイアースに問いつめられ、
イスフィールは今までのことを話した。

「何でそんなことしたんだよ！？」

「だつて、」

「だつてじやない！」

怒鳴られて顔を上げると、そこにはレイアースの怒った顔とセイレンの苦笑い。

「薔薇は闇の人に狙われてんだぞ！抜け出した時に偶然会つて殺されたりしてたらどうするつもりだつた！？」

イスフィールは、確かにそんなことは考えていない。

「まあまあ。イスフィールにも理由があつたんだろう？」

セイレンがレイアースをなだめ、優しく聞いた。

「私は大人しくしてるのが性に合わない。それだけよ。」

「死んでたらどうするつもりだ？」

「私の親戚にも似た力を持つ人がいるわ。薔薇はその人ができるじやない。」

「バカ言つてんじゃねえ！」

ついに、レイアースが立ち上がった。

座っていたイスが後ろに倒れる。

「薔薇としてはそれでもいいかもしないし、そうするしかないだろつた。けど！ いなくなるのは『薔薇』じゃねえ。『イスフィール』つていう『人』なんだよ！」

イスフィールは驚きで目を見張る。

「でも、さ。薔薇が人のために何かやっちゃいけないの？」

「そういう意味じやねーよ。『イスフィール』がいなくなつたら、ゴニゾンさんやセイレーン、今はいないソフィアさんはどう思う？ 悲しむんだ。そういうことを起こさないために、どうすればいいか。答えは出てるよな？」

静かな、淡々とした口調。

その言葉達はすつとイスフィールの頭に入り、答えを知つたイスフィールは深く頷いた。

「無茶はせずに、別のやり方で、危険じやない方法で事実を探り出し、闇の心を浄化する。」

「その通り。じゃ、行くか！」

「行くつて、どこに？」

レイアースはニッヒと笑つて言つた。

「もちろん、ラクリーン家だ。」

5・イズライール、バレた！？

樂園の薔薇

5・イズライール、バレた！？

〈3〉

「ここ、なんだけど…。」

イスフィールは護衛の2人を連れ、今来た道を引き返した。ラクリーン家は町のはじっこにあるため、商店街とはちょっとぴり遠い。

「えーっと、俺らと同一年の奴、いるんだろう？」

「俺ら？え、もしかしてレイアースと私って同一年！？」

「もしかしなくてもそーだよ。つーか知らなかつたのか。」

「レイアースと僕は双子だからね、イスフィール。」

目的を見失いかけていた3人。

しかし、セイレーンのセリフでイスフィールは思い出し、訂正する。

「セイレーン！私、じゃーなーくて……俺は今はイズライールなんだ！レイアースも間違えないで！」

「おお。そーいやそーだったなあ。」

「で、トライドにはイールって呼ばれてるから。あんた達もそれで呼んでいいよ。」

「あんまし変わつてねーけどな。」

その小さなレイアースの呴きをイスフィールの耳は逃さない。

「うつさいわね！その方が短くて良いじゃないの！」

「短くても慣れない名前には変わりはないだろ？」

「ふつ……私は3日で慣れたわ。」

「誰にもイスフィールって呼ばれてないからだろ。」

「ぐつ……」

それを言わわれては何も言い返すことができない。

「ほり、2人ともー入るよ?」

セイレーンはいつもこうこう役である。

「…分かったわよ。とにかく、お前に気を付けてねー!」

「へーへー。」

何だ、そのテキトーな返事ー!と思ったが、ロゲンカは体力を使う。
それにキリがいい所はない。

永遠に続くのも疲れるから、2人はこれでやめておいた。

5・イズライール、バレた！？

樂園の薔薇

5・イズライール、バレた！？

<4>

「トライドー？」

「あ、イール！ おかえり！ つて誰？」

トライドはイスフィールの後ろにいる2人に目を丸くした。
そりやそうだ。

双子が見知ってる人の後ろに並んでいたら、誰でも驚くだろう。

「同じ薔薇の護衛。レイアースとセイレーンだ。」

「お前、薔薇の護衛なんて言つてんのかよ。」

レイアースがトライドにバレないよう耳打ちする。

「仕方ないだろ！ 相手が安心して話せるのはそれくらいしか思い浮かばなかつたんだよ！」

バレた時のために男口調。

それを聞いて、セイレーンが苦笑する。

慣れとは恐ろしいものだ。

「すごいね。3人も護衛がいるんだあ」

本気で感心したような声に、3人は沈黙するしかなかつた。

「で、俺らはおまえが言つていた闇の人物について少し調べてみたんだ。」

レイアースがどこからか資料を取り出しながら言つ。

イスフィールはそれを見て、「先に私に教えてよ！」と言おうとしたが、「話すひま無かつたし。」と言われるのが分かつていた。
仕方なく口をつぐむ。

レイアースはそれを見て「ヤツと笑った。

（本当、イヤなやつ！）

「ステライト・マリーナ。『星の魔術師』と西の街から来たらいい。

ふたつ名は『星の魔術師』。

「星の？ それなら聞いたことがある。」

「ああ。普段はタロット占いをこの商店街の隅っこでやっていたらしいからな。」

その会話を聞いて、イスフィールはちょっとびくべくむ。

（レイアースたちはそこまで情報を集めたのに、私は。。同じ時聞だつたのに、何もやってない。）

これなら、抜け出した意味など無い。

イスフィールは自分でそれを確信してしまったのだ。

「イール？」

トライドの声だった。

あわてたのとびっくりしたのとを混ぜた声で。

「泣いてる…？」

自覚もなかつた。

止めどなく涙があふれ、イスフィールの顔を濡らした。

「や、え？ ちょっと？ え、わけわかんない！」

イスフィールは自分の涙にとまどい、女子に戻つて声を上げる。

「頭、冷やしてくるつ！」

追いかけるものなどいないのに、イスフィールは逃げた。

たぶん自分から逃げたかったのだ。

5・イズライール、バレた！？

樂園の薔薇

5・イズライール、バレた！？

<5>

近付いてくる足音に、イスフィールは顔を上げた。

「レイアース。」

「よお。おさまつたか？」

来たのはレイアース一人。夕方の赤い空を背景に、こつちにやってきた。

「何で急に泣いたんだよ。」

イスフィールが座っていた壙の上にレイアースも座った。
10センチくらいの距離を開けて。

その距離がぴつたりだった。

「…私が、役立たずだから。」

「ま、仕方ないじゃん。」

あつさりとレイアースは言った。

まるで、全てを知っているかのように。

「なんで、仕方ないの？」

「だつてお前、行動に向いてるし。」

「はあ？」

意味不明だ。

思わず大きい声で聞き返す。

「資料を集めてやるより、行動して調べる方がいいだろ？」

確かに。

情報が書いてある紙をたくさん集めたら、読む気がまったく無くな

る。

逆に自分の身体で感じた方が早いとイスフィールは考へているからだ。

「でも、資料じゃなきゃ分からることもあるからな。」
オマケとばかりにイスフィールはレイアースから『パンパン』された。
思つたより痛くて、顔をしかめる。

「痛いじゃん！なにすんの！？」

「でもな、お前は一つ間違つてる。」

得意気にレイアースは笑つた。

イスフィールの言葉など聞いてない様子で。

「役立たず、じゃないよな。」

「？」

「闇の人。会つたんだろ？」

「え？ あ、うん！」

抜け出し1日目の夜だ。

確かにあの格好は『魔術師』。

「というわけだ。だから、お前は役立たずじゃねーよ。」

レイアースが優しく笑う。

イスフィールはレイアースの正面に回り、言った。

「ありがと、レイアース！」

「は？」

「なぐさめてくれて、ありがと。」

照れくさいから、イスフィールは回れ右をして駆け出す。
後ろでレイアースが何か叫んでいるが、気にしない。

遠くで見ていたセイレーンは思つ。

これこそ、『ケンカするほど仲がいい』である。

6・心の闇、浄化します！？

樂園の薔薇

6・心の闇、浄化します！

<1>

また会った。

誰について、闇の人　　ステライト・マリーナに。前と同じような茶色のローブを身につけている。

「マリーナ…。」

イスフィールが呼んだその名に、その人はこっちを見た。「だれ？…もしや、この人の知り合い？」

この人、とマリーナが指したのは自分の体。綺麗な細い指がローブからのぞいた。

「今私はマリーナじゃないよ？」

「今…私？…どういうこと？」

セイレンが聞くと、その人はくすくす笑った。これ以上おかしいことなどないようだ。

「薔薇の護衛なのに、知らないんだあ。いいよ、教えてあげる。」

あ、と気付いたように、その人は付け加えた。

「でもね。この人の中にある闇を浄化してみせてよ。」

マリーナ（？）はその場に倒れ込む。

まるで捨てられた操り人形のように不気味だ。

「マリーナ？」

呼びかけると、ゆっくり立ち上がった。

『憎い…。』

『え？』

「あの人達が、憎い……。』

「イスフィール！」

離れる、とレイアースが呼びかける。

セイレンとの練習によって手に入れた素早さで、2mほど離れた。

『自分勝手で、あんなの人の心を持つてない！』

ロープの内ポケットから出てきたのはタロットカード。

『皆、負の感情に彩られる！』

空中で混ぜられたカードは1枚を残してスッと消える。その1枚のカードは『月』。

『効果は…迷い、など。絵のザリガニは迫り来る危険！』

カードから出てきた黒いもや。

よけたイスフィール達には当たらず、地面にしみこんだ。

『よけない方がよかつたんだぞ？』

マリーナは笑いながら言つ。

『このカードの術は、負の感情を増やして人を危険に追い込むといふものだ。地面にしみこめば、各地に広がって、どこに向かうか私でも分からぬよ。』

マリーナはロープを脱ぎ捨てた。

赤みがかつた茶の髪と星のような金色の目があらわになつた。

『人の心を持たない者など、消えればいい！』

再びタロットが混ぜられる。

『マリーナ、あなたは間違つてる！』

凛とした声が、商店街の隅で響いた。

6・心の闇、浄化します！？

樂園の薔薇

6・心の闇、浄化します！

＜2＞

声の発信源はイスフィールだった。

「人の心を持たない人なんていないわ！あなたのようなその感情も、人ならば必ずある心だもの！」

『必ず…ある心…？』

マリーナは復唱する。

イスフィールはさらに言いつのつた。

「あなたがこっちに来て何があつたか。私は全然知らないわ。でもね、嫌なことばっかりじゃないでしょ？」「

タロットを混ぜるマリーナの手が止まった。

「そのタロットカードだって、そういう使い方じやないばず。違う？」

『あの人達は、こっちにあつた私達の家を燃やした。誰だか分からぬから、そちらの貴族を捜した。それでも、見つからなかつた…。』

声が恐ろしいものから、幼い少女の声に変わっていく。

『でも、村人達は優しい。私達をかくまってくれた。それが間違いだつたんだ。村を追い出されたんだ、やさしい、人なのに…。』

マリーナはいやいやと首を振つた。

これ以上、迷惑をかけたくなかつたことは、その場の全員分かりきつていた。

『誘いに乗つてしまつたのね。闇の人からの誘いに。』

『 もう、いいよ…。あのころにもどりたい…。』
マリーナの手からタロットカードがバラバラと落ちた。
イスフィールは一枚拾う。

『法王』のカードだ。

意味は『良い忠告・人生の転機』などである。
「もどろく、マリーナ。」

自然にイスフィールはマリーナの頭をなでた。
その手の下でマリーナは泣きじゃくる。

「イスフィール!…どうするつもり!…?」

セイレンが驚いて聞く。

それに、イスフィールは得意げに言った。
「もちろん…心の闇を浄化するのよ。」

6・心の闇、浄化します！？

樂園の薔薇

6・心の闇、浄化します！

◀ 3 ▶

「もちろんって、お前できんのか！？」
レイアースが慌てて聞き返した。

「ええ。やってみせる。」

今までなら『分からぬいけど』と答えていただろう。
でも今回は違っていた。

「私の中に、出来るつて言つてゐる気持ちがあるの。それに、マリーナを助けなきや。」

闇に飲まれた者を助けるのは、殺すほかに道はない。
だから闇に飲まれる前に、薔薇が助けなければいけないのだ。
それとイスフィールの性格を知つているセイレーンは、仕方なくこ
う言つた。

「無理しない程度にやりなよ。」

イスフィールは笑つて頷いた。

「大丈夫。」

自分が身につけている薔薇のペンドントに触れる。
鮮やかなピンクの光がイスフィールを包んだ。
目の前には、泣いているマリーナ。

イスフィールの気持ちは、彼女を助けたいという、強い望みだ。

（その望み、無駄にはなりませんよ。）

触れている薔薇のペンドントから意思が送られてきた。

軽やかな女性の声だ。

(誰?)

イスフィールもそれにあわせて意思をペンドントに送る。
ちゃんと通じたようだつた。

(私は楽園において一番最初の薔薇です。今までこれを付けた人は
何人かいりますが、反応できたのはあなただけです、薔薇姫様。)

(一番…最初の…?)

(はい。エプスタイン・カリス カリスとお呼びください)
話すたびにイスフィールを包む光は強くなつた。

(とにかく、説明は後です。今は、あの少女を助けるのでしょうか?)

思い出してイスフィールは深く頷く。

(では、この光に意思を乗せて)

意味が分からなかつたが、助けたいという思いをより強くした。
すると、それにあわせて光がより眩しくなつた。

(それでいいのです。これから教える言葉を、一緒に。)

頭に自然と浮かぶ言葉。

イスフィールは手を前に出し、言つた。
「あなたの心の闇、浄化します!」

6・心の闇、浄化します！？

樂園の薔薇

6・心の闇、浄化します！

<4>

『ねえ、どこ行くの？』

『お母さんに会いに行くんだよ。』

古びた廊下を男の人に手をひかれて歩いていく。
時折転びそうになつたが、なんとかある部屋の前に来た。
その扉を男の人が開ける。

『お母さん…？』

部屋に置いてあるベッドには、女人人が寝ていた。

『…あら、マリーナ…来てくれたの？』

目を細めてこっちを見る。

やせた指からは、自分に向けての優しさでいっぱいだつた。

『ねえマリーナ…。大切な人は見つかつた？』

『…ううん…まだ。』

『そう。…早く見つけて、守るのよ。』

何回も言われてきた言葉。

大切な人が何のことだか、分からなかつた。
急に頭に乗せていた手が重くなる。

『母さん？…ねえ、お母さんつてば…』

それきり、母の体は動くことがなかつた。

* * *

カサ、と音がして、マリーナのロープから何かが落ちた。

イスフィールは手を下ろす。

マリーナはその場に倒れた。

（薔薇姫様。浄化、成功ですよ。）

ペンドントからカリスの意思が送られてきた。

（うん…。）

疲れて、それしか返せない。

さつきロープから落ちた物を見ていたセイレーンが、「うわっ」と声を上げる。

「どうしたの？」

「…これクモだ。」

赤ちゃんのこぶしごらいはある。

イスフィールは思わず後ずさつた。

「しかも、毒グモじやねえか。」

レイアースも覗き込む。

ふいに後ろから声がかかつた。

「あ、君、薔薇姫さんなんだ。なるほどねー。」

聞いたことのある声に振り向くと、少年が一人立つていて。

暗闇なのに、少年の銀髪が光っていた。

「約束だよね。僕の事、教えてあげるよ。」

その少年はにつこりと微笑した。

7・闇の毒グモ？

樂園の薔薇

7・闇の毒グモ

< 1 >

「ま、そのクモを見てたら分かると思うけど。少年は顔を少し真剣にしていった。

「名前は…」

（薔薇姫様。彼の名前はイダです。毒グモ操ることが出来る闇の。）

「そうだよ。僕は闇の部官の1人。リラノ・イダっていうんだ。よろしくね、薔薇姫様。」

イスフィールは驚いて言葉をなくした。

「イダ…。あなた、カリスの言葉が聞こえるの？」

「カリス？ああ、最初の薔薇姫様ね。ペンダントの中にいたんだあ…。すごいね。」

琥珀色の目を細めたまま歩き出す。

イダはイスフィールの前に立つた。

「…君は、まだ芽のままか…。でも、カリスに気付いたってことは本物だね…。」

言いながらペンドントに手を伸ばしてきた。

イスフィールは逃げようとするが、足が鉄の塊になつたように動かない。

「逃げれないよ。僕の術で君は動けない。」

「なに、それ…っ！」

イダの手がペンドントを掴み、力を込めた。

赤い光がペンドントから放たれ、辺りが夕方のようになつた。

「久しぶり、カリス。君は僕らを封印したけど、また戻つた。……サポートって邪魔なんだよね。」

さらに力を込めるイダ。

（いやああああ！！）

薔薇が赤から茶に変わつていく。

カリスの悲鳴がイスフィールの頭に響いた。

「……やめて……」

イスフィールの声がかされた。

聞き取れなかつたのか、イダが不思議そうな顔をする。

「やめて……！ カリスを離して、イダ！」

イスフィールは思つまま命じた。

従うわけがないのに イダの手はぎこちなく離れていく。

（カリス、大丈夫？）

（はい……。ありがとうございます、薔薇姫様。）

「君は……何なんだ……。まるで、あのお方のよつな……。」

イダが呆然と呟く。

そんなイダをイスフィールはにらみつけて言った。

「あのお方が誰だかしらないけど。私は薔薇姫。エプスタイン・イスフィール！」

イスフィールは高らかに宣言した。

「必ず あなたを、倒す。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4969z/>

楽園の薔薇

2012年1月5日18時47分発行